

「被害者の視点を取り入れた教育」にロールレタリングを
用いたプログラムの効果の研究

立命館大学産業社会学部

岡本 茂樹

ゲシュタルト療法研究 別刷

第3号 (2013年8月)

「被害者の視点を取り入れた教育」にロールレタリングを用いたプログラムの効果の研究

岡本茂樹

Study of the Effect of a Program for Studying Viewpoints of Victims Using Role Lettering

Shigeki OKAMOTO

本研究は、一人の受刑者の心理的变化を追跡することで、「被害者の視点を取り入れた教育」にロールレタリングを用いたプログラムの効果を検証している。「我慢することが大切だという考え方」「力に対して力で対抗することが必要だという考え方」を持っていた受刑者Aは、「加害者の視点」を取り入れたグループワークやロールレタリングをするなかで、自分自身の考え方や価値観の形成に過去の育ちの背景が関係していることを自ら洞察する。「自己理解」と「意識改革」が進んだAは、「力に対して力で対抗しない考え方」を取り入れ、最後は人に頼って生きていくという、「再犯しないための生き方」を身に付けている。また、本プログラムでは、初めて「被害者の視点」として、「私から被害者へ」のロールレタリングと「被害者とのロールプレイング」を用いている。こうした課題を取り入れることによって、受刑者Aの被害者に対する罪の意識は深まっている。

以上から、「加害者の視点」から始めて最後に「被害者の視点」を取り入れた本プログラムは、受刑者の更生への意欲を高めることが示唆された。

キーワード：被害者の視点を取り入れた教育，ロールレタリング，プログラム

I はじめに

2006年5月に「刑事施設及び受刑者の処遇等に関する法律」が施行され、各刑事施設では受刑者の犯罪特性に応じて改善指導を行うことが義務づけられ、殺人や傷害致死などの生命犯の受刑者には、「被害者の視点を取り入れた教育」が実施されることとなった。この教育内容は、「自分の犯した犯罪を振り返らせ、被害者等がどれほど大きな身体的・精神的被害を受けるかを認識・理解させた上、被害者等へのしよく罪の意識を喚起し、慰藉等のための具体的方法を考えさせる指導」を行うことを目的としている⁽¹⁾。要するに、「被害者の視点を取り入れた教育」とは、その名が示すとおり、加害者である受刑者に、命を奪われた被害者の無念な思いや残された被害者遺族の気持ちを考えさせ、自分がいかにひどいことをし

たのかを考えさせる方法なのである。この方法は、一見「正攻法」のように思えるが、実際には思ったような成果が上がっていないのが実情である。滋賀刑務所において、寺村らが行った「被害者の視点を取り入れた教育」では、被害犯罪の実態、被害者の心の苦しみなどをテーマとして被害者の苦悩を理解させ謝罪させる方法を取り入れているが、結果として「あくまでも自己本位で、自己満足のための慰藉の気持ちに過ぎない面も見られるのが実情である」⁽²⁾と報告している。さらに、疫学的手法を用いて、犯罪対策の効果を研究しているキャンベル共同計画によると、「被害者の心情を理解させるプログラムは、再犯を防止するどころか再犯を促進させる可能性がある」という驚くべき報告をしている⁽³⁾。この研究に携わっている浜井は、「あくまでも仮説であるが」と断ったうえで、再犯を促進させる理由として「被害者の心情を理解させることは、ある意味では彼

所属：立命館大学産業社会学部

表1 対象者の年齢と罪名

対象者	年 齢	罪 名
A	50歳代後半	危険運転致死罪
B	40歳代前半	殺人
C	50歳代前半	殺人未遂
D	50歳代前半	殺人未遂
E	40歳代前半	強盗殺人未遂

らがいかに社会的に非難されることをしたのかを理解させることであり、自己イメージを低めさせ、心に大きな重荷を背負わせることになる。被害者が死亡している場合には、被害者の心情を本当に理解できれば、自然と『自分だけ生きていいのか?』と思うはずである。犯罪者に限らず、その状態で生き続けるのは苦しいはずである。このプログラムは、ある意味では、社会での生きにくさを増加させることにつながってしまい、社会不適応を促進しているのかもしれない⁽⁴⁾と述べている。黒沢らが非行や犯罪を繰り返す人は、「自分はろくな人間ではないといった否定的な自己認知」⁽⁵⁾を持っていると指摘していることから、浜井の仮説はけっして的外れなものではないと考えられる。もともと自尊感情の低い受刑者が、この教育を受けることによって自責感情を強め、自分は「生きる価値のある人間ではない」と思うてしまうと、社会に復帰してから他者と良好な関係を築くことは難しい。そうなる、この教育そのものが再犯を起こす危険性を孕んでいることは否定できない。

こうした問題を鑑みて筆者は、被害者の心情を理解させるためには、受刑者が自分の内面の問題と向き合うことが必要であり、そのためには何より受刑者が「本音」を表現することが重要であると考えている。藤岡は、刑務所内での集団指導に触れ、『『言わなければわからない』』ので、実際に考えていることを口に出し、それを別の視点を持つ人々と自由に検討してこそ、行動変化への道は開ける⁽⁶⁾と本音を語ってその意味を検討する方が近道であると指摘している。

以上から、本研究の目的は、本音を表現することを主眼に置いたグループワーク（以下、GWと略記）と、ゲシュタルト療法の空椅子の技法をヒントに開発されたロールレタリング（以下、RL

と略記）を取り入れたプログラムの効果を、事例を通じて検証することにある。なお、プライバシー保護のため、本人と特定されないように事例は修正してある。また、事例の公表にあたって刑事施設と受刑者の許可を得ている。

II 事例とプログラムの概要

1. 事例の対象者

対象者は、出所を数年後に控えた表1の5名である。本論では、暴力行動に対して、最も親和性が高かったA受刑者に焦点を当てることとする。以下、Aの生育歴と犯罪に至る経緯を記す。

Aの生育歴：幼少時に両親が離婚し、Aは母親に引き取られる。小学生の頃に母親は再婚するが、Aは義父とは馴染めなかった。中学入学後から不良交友が始まり、高校に進学するもののすぐに中退。その後、暴力団に加入し覚せい剤を使用し始める。一度は暴力団から離脱するが、再び覚せい剤を使用し服役する。出所後は再度暴力団に加入し、覚せい剤の使用を繰り返したため、再び服役する。出所後、40歳前半で生活保護を受給しながら義父と生活することになるが、仕事に就くことはなかった。

Aの犯罪に至る経緯：飲酒運転をしていたとき警察官に職務質問をされそうになったので、制止を振り切って逃げようとしたところ、対抗してきた車2台と衝突し被害者を死亡させた。

2. プログラムの期間・回数

実施期間はX年5月～X+1年3月の11ヶ月間で、授業は7回行った（1回の授業は90分）。最終回だけ「公開授業」となり、本刑事施設が所属する地区の各矯正施設からの見学者の前で授業を行った。

また、第2回目の後とプログラム終了後に個人面接を行い、最後の授業終了後にアンケートを実施した。アンケートでは、「プログラムの役立ち度」「『罪の意識』の深まり」や「『更生への決意』の高まり」などの質問を7段階で評定させ、自由記述の質問も行った。

3. プログラムの内容

プログラム全体の流れが分かるために、GWの内容とノートの課題を表2に示す。「交換ノート」の方法として、毎回授業の最後に筆者（以下、Coと略記）が課題を提示し、その後受刑者が書

表2 GWの内容とノートの課題

回	GWの内容	ノートの課題
第1回	1. アイスブレイク：「後出し負けジャンケン」 2. 「万引きをした女子高生F子の反省文」を用いたGW	1. 授業の感想 2. 「今、考えていること・悩んでいること」
第2回	1. 「自己開示と自己受容」のGW 2. 覚せい剤使用の芸能人Gの謝罪文を用いたGW	1. 授業の感想 2. 「幼いときのこと」
個人面接（第1回）		
第3回	1. 虐待をした事例を用いたGW 2. 感情表現を促すワーク1	1. 授業の感想 2. RL「幼いときの私から父親・母親へ」
第4回	1. 虐待をした事例を用いたGW（復習） 2. 「いじめ」の事例を用いたGW 3. 感情表現を促すワーク2	1. 授業の感想 2. 「素直な感情を出せなくなった理由」 3. RL「今の自分から過去の自分へ」
第5回	1. リフレーミング 2. 殺人事件の事例を用いたGW	1. 授業の感想 2. 「私にとって更生するために必要なこと」 3. RL「私から大切な人へ」
第6回	1. 友人からの依頼の断り方のGW 2. 被害者に関するGW	1. 授業の感想 2. RL「私から被害者へ」
第7回	1. 非行少年の作文を用いたGW 2. 被害者の視点を取り入れたロールプレイング	1. 全体の授業の感想
個人面接（第2回）		

いたノートにコメントを書いて返却する形にした。

Ⅲ 結果

各回のGWの内容を簡単に紹介した後、Coとの交換ノートに記されたAの心理的变化を記載する。なお、Aの言葉・文面は「 」で、Coの言葉・文面は〈 〉で表記する。

第1回 GWと交換ノート

最初に、後出し負けジャンケンを行う。ジャンケンで後出しして、負けることが勝つというゲームである。結果として受講者は後出しして勝つことになり、全員から笑い声が出る。ここでCoは、勝たないといけないといった価値観の刷り込みが問題行動（犯罪）を起こす場合があることを伝え、数人は驚いた表情を浮かべる。次に、万引きをした女子高生F子の反省文を取り上げる。Coは、〈F子の母親は過干渉で父親が権威

的〉と説明したうえで、次の反省文を読み上げる。〈(前略) 今まで自分に甘く、お店の人、先生方、親に迷惑をかけ、反省しています〉。感想を求めた後、Coは〈F子はどんな気分で毎日過ごしていたと思いますか〉と問うと、Eは「こんな家だと息苦しいだろうな」と言い、Aは「また万引きしますね」と続ける。2人の発言を受け、Coは〈親への不満があったかもしれませぬね〉と続け、〈反省する前に、なぜ万引きしたのかを考えることが大切〉と言うと、A、CとEはうなずいた。

Aの「授業の感想」：「お互いが初対面であるが故に、なかなか自分の本音はみせないものです。今日の授業で積極的に意見を出したのは一部の人のみです。という私も先生の方から向けられれば思っていることを話すという感じでしたが。十人十色といいますが、自分と違う考え方を聞くこともプラスになると思いますので、これから一年

間、真面目に授業を受けて、自分の糧になればと思います」

Coの返信：〈皆さんが自然と意見を出せる場に行きたいと思っています〉

Aの「今、考えていること」：「小さいことをいえば沢山ありますが、『泣いて過ごすも笑って過ごすも同じなら笑って過ごそう』が私のモットーです。嫌なことは次の日に持ち越さず、その日のうちに終わらせて一日一日を気分良く終わらせていこうと思います」

第2回 GWと交換ノート

自分の欠点や課題を語り、その発言に対して他のメンバーが肯定的な言葉で応答する。これによって、受講者は自分の否定的な面を開示し受容される体験をする（「自己開示と自己受容」のGW）。Aは「周囲に気を遣うこと」と言うと、他のメンバーから「私も同じですよ」と返事があり、笑顔で応じる。次に、覚せい剤を使用した芸能人Gの謝罪文を読む。「自分が弱かったから覚せい剤を使用した」の一文を捉え、『自分が弱かった』とありますが、では『強い人間』とはどんな人ですか」と問いかける。するとAは「我慢強い人」、Eは「自分の意見を曲げない人」と答える。2人の意見を受け入れつつ、〈こうした考え方には自分に無理をしたり他者の援助を受けなかったりする面もありますね〉と言い、〈皆さんは、人一倍我慢して頑張ってきましたか〉と問うと、Aは自ら生い立ちを語り始め、祖母を喜ばせるために無理をした生き方をしてきたことを洞察する。

Aの「授業の感想」：「自分でも気がつかなかった心の奥の奥にあったものに今日の先生との会話のなかで発見して、我ながらびっくりしたのが正直なところです」

Coの返信：〈Aさんが本音を話してくれたからこそ、大切な気づきが得られたのだと思います〉

Aの「幼いときのこと」：「両親は私が小学校にあがる前に離婚したので、私と弟は母方の祖母に育てられました。祖母は躰に厳しい人で、私が泣いて帰ってくると鬼の形相で、『ケンカに勝つまで帰ってくるな』と家の中に入れてくれない人だったので、ケンカで負けて痛い目にあい、そのことで祖母には叱られて、ダブルパンチでした。小学校高学年の頃には一番の悪ガキになりました。

（以下、省略）」

Coの返信：〈Aさんは『勝たないといけない』といった考え方を強く持っていませんか。もしそうだとしたら、それはこの頃につくられていたのかもしれない〉

Aとの個人面接（第1回）：「皆が慕ってくれるから、お山の大将になりたかった。一番になることが好きです」〈どうして、そう思うようになったと思いますか〉「今考えると、おばあちゃんを喜ばせようとしていたのだと思います」

第3回 GWと交換ノート

ホスト遊びで幼児を遺棄した母親の虐待事件を取り上げる。その際、母親がブログに書いた内容（生き辛さがつづられている）を紹介する。〈ブログを読んで、事件当時母親はどんな気持ちだったと思いますか〉と問うと、Eが「ホスト遊びで気を紛らわせていたのかもしれない」と話す。Eの言葉を受けてCoは〈ホスト遊びは生き辛さを感じていた彼女を『救っていた』という見方もできますね〉と伝えたくて、〈辛い感情を抱え込むのではなく、外に出すことが必要〉と述べ、感情表現を促すワーク1を実施する。具体的には、「最近、うれしかったこと、悲しかったこと、辛かったことなど」から一つ選び、ペアになって対話をする。例えば、一人が「私は……が辛かったです」と言うと、相手は「それは辛かったですね」と応答するのである。「苦手だなあ」と言いながら笑い声も起きる。

Aの「授業の感想」：「回を重ねるごとに、私にとっては身になっていると思います。正直なところ、自分の弱いところを人に見せたり、100%人を信用して何でも相談したりすることが私に出来るだろうか？ という不安もあります。が、この教育を受ける前に、この私がこの様な気持ちになるなんて思ってもいませんでした。そのことを考えると、私の意識改革は一步も二歩も前進したと思います」

Coの返信：〈ありがとうございます。Aさんがいろいろなことに気づき、『意識改革』さえあったことをとてもうれしく思います。失礼な言い方になりますが、Aさんは今、すごい『心の成長』をしていると私は感じています〉

AのRL「幼いときの私から父親・母親へ」：「小学校にあがる前だったと思う。友達と遊んで

いた私がハチに刺されて家に帰ると、車に荷物を積む父がいた。父はイチジクの葉を千切り、その樹液をハチに刺されたときは、これが薬になると言いながら塗ってくれた。それが我が家で見えた最後の父の姿だった。その後、母も県外で働きに出ていき、私と弟は祖母に育てられた。厳しい躰だったけど、大切に大切にされていたことは十分にわかります。でも、それイコール100%幸せかというと、やはり両親がそばにいない寂しさはずっと心にありました。

小二の時、あなた達が再婚して一緒に暮らす様になったけど、新しい父とうまくいかず、そのことであなた達がたびたびケンカしていることも知っています。が、今の父を好きになることはできません。ごめんなさい。(注：文字がにじんでのいる)

私は成人して、自分に子ができるまで義父のことが嫌いで嫌いで仕方なかった。(この後、中学の頃、家が嫌で家出を繰り返すなど反抗したことがつづられている)母が亡くなり、通夜の席、義父は一晩中泣いていました。その姿を見たとき、あ～この人は母のことを本当に愛してたんだな～と感じ、それから義父との距離が日毎に縮まった気がします。「(RLを書いた感想)始めは思い出話だけ書くつもりだったのですが、途中で義父と仲良く過ごすことがなかったのではないかと思い、こういう文になりました」

Coの返信：〈この課題に真剣に向き合ってくれたんですね。ありがとうございます。そして、正直な気持ちを書いてくれてありがとうございます〉

第4回 GWと交換ノート

中学時代に長年に渡って集団でいじめを受けた子どもの事例を取り上げ、〈このようないじめを受けたらどうしますか〉と問うと、Eが「こんなことがあるのですか！ 私ならやり返しますね」と言い、他の受刑者もうなずく。そこで〈この考えは、力に対して力で対抗することですね〉と確認し、〈この考え方でいるとこの先どうなるでしょうか〉と続ける。するとAは「こうして犯罪は起きるんですね」と言う。Aの発言を称えた後、〈他にいい方法はないでしょうか〉と問うと、Dが「誰かに助けを求めたい」と応じる。Dの言葉を受けて、Coは人に援助を求めることの大切さ

を伝える。最後に、感情表現を促すワーク2を行う。方法は、カードに感情を表す言葉を10個程度書いたうえで裏向きにし、一枚引いて、その感情に関するエピソードをペアになって話し合うのである。

Aの「授業の感想」：「私が彼の立場なら、やられたらやり返すという行動を取ったと思います。いじめは、自分の方が立場が上と思うから下と思われた者はいじめを受けるのです。だから一度として自分の弱いところを見せてはいけないと思うのですが、この教育では弱い部分を他人に見せていいというので、心の問題は難しいです」

Coの返信：〈本当の考えを書いてくださって、ありがとうございます。授業でも触れましたが、『やられたらやり返す』ということは、『力に対して力で対抗する生き方』を身に付けることとなります。こういう生き方を続けていくことで、これからどういう方向に向かうことになるのか、これからの授業でも考えていきましょう〉

Aの「素直な感情を出せなくなった理由」：「そういうことを言われるまでは、自分がそうであるとか思ってもみませんでした。物心がついた頃から、『長男なんだから我慢しなさい』とか親に言われ、また自分でもそれがいいことだと思っていました」

Coの返信：〈子どもは親の言うことは絶対だと思ふところがあるので、そのように受け止めるのも当然ですよ〉

AのRL「今の私から過去の私へ」：「A。もうすぐお前は不良と人から言われる様になり、親父とは今まで以上にギクシャクした関係になります。(この後、父親と大喧嘩したことがつづられている)なんで、こういう手紙を書くのかというと、このケンカから親父がお前のことを少し男として見てくれる様になります。だからお前も何でも決めつけしないで、少し引いたところから物事を見てみな。また、違うものが見えてくるから……。尖らず、肩の力を抜いて、自分の方から一歩嫌なことに近付いてみな。悪いことばかりじゃないから」

Coの返信：〈『尖らず、肩の力を抜いて』—これですね！ これまでAさんは、尖って肩に力を入れて生きてこられたのではないのでしょうか。そして、そうした生き方は、Aさんを支える力にも

なっていたと思います。Aさんがこれまでどのように生きてこられたのか分かってきたように思います。これからはAさんのことをたくさん教えてください

第5回 GWと交換ノート

最初にリフレーミングを行う。具体的には、各受講者が自分の短所を書き、それを他の受講者から長所に置き換えてもらうのである。思わぬ回答をもらった受講者は「こんな見方もあったのか」と驚きの声をあげる。次に、殺人事件の事例を取り上げる。事例は、喧嘩に巻き込まれている友人を助けるため、友人を殴った相手を殺害してしまうという内容である。Eは「殴り返すとまた刑務所ですね」と言う。数名が同調するなか、Aが「今までだったらやり返す方法以外思いつかなかった」と話す。ここでもCoが「逃げることの大切さ」を述べた後、〈友人ではなく妻子だったらどうしますか〉と問うと、Aは「それだとやり返します」と言う。〈私も逃げないと思いますが、暴力では太刀打ちできないので『止めてほしい』と言って妻子をかばいます〉と言うと、Aは「それが一番勇気が必要ですね」と話す。

Aの「授業の感想」：「この頃は人から人間関係のことで相談されたり友達と話したりするとき、この改善指導で学んだことが口から出ることが多々あり、そういう時は、『俺も少しは進歩しているのかなあ』と思います。この改善指導を受け、どこまで理解し、どこまでそれを実行できるか分かりません。が、この教育を受けていなければ、俺は変わることなく以前のままの俺であったと思うのです。

これは今日の教育でも言えることですが、先生がケンカしているのが自分の家族だったら背にして庇うと言うか、抱く様にして守ると言っていましたね。多分、以前の私ならそんな行動は絶対に理解できなかったと思うのです。ですが、この教育を受けたことで、先生の話聞いた時に、『それは一番勇気のいる行動ですね』という言葉が私の口から零れたのです。正直に言うと、これには自分が一番びっくりしました（笑）。しかし知らず知らずのうちに、先生のもの考え方が私の頭のなかに入ってきているのは確かな様です」

Coの返信：〈この改善指導を受けて、Aさん自身が自分自身の変化に気づいているということ

は、Aさんが思っている以上に成長されていると私は思っています。今までとまったく異なった考え方を言えたことは、Aさんにとってすごい心の変化ですね！

Aの「私にとって更生するために必要なこと」：「以前なら強い意思とか書いたのですが、この頃はそんなことよりも（それも必要なのですが）、私のことを支援してくれる人が一番必要なのではないかと思うようになってきました。（中略）何より大事なのは、私の心が折れそうな時に助けてくれる人ではないかと、この頃思う様になりました」

Coの返信：〈すごいですね！ 文面から、Aさんが『人に頼ること』を大切にしている気持ちが伝わってきて、私はとてもうれしいです〉

AのRL「私から大切な人へ」：「お袋。そちらはどうですか。おじいちゃん、おばあちゃん、親父と一緒にですか。多分、皆一緒なのでしょうね。

あなたが逝って、もう〇年になります。その間、いろんな事が沢山あったけど、あなたがここに居たらなあと思うことばかりでした。（中略）そのうち、俺もH（息子）もI（妻）もそちらに行くけど、その時はIを褒めてやってください。では、俺達がそちらに行くまで、親父と仲良く」

Coの返信：〈早くに亡くなられたお母様のことを大切に思う気持ちが伝わってきます。この文面には、Aさんのお母様に対する『愛』がいっぱいつまっているように感じました。そして、Aさんが背伸びをせず、素直な生き方をしていこうと思う気持ちも伝わってきました〉

第6回 GWと交換ノート

友人からの悪い誘いの断り方を練習させるが、受講者は曖昧な言葉を言って拒否できない。そこで「はっきりと手短かに断る方法」を提示し全員に練習させると、皆「勉強になりました」と納得した表情で答える。次に、被害者について自由に語らせる。Eは被害者に対して手紙すら書くことを止められていることを話し、Aは「反省といっても、言葉で簡単に言えるものではない」と続ける。また、Dは「被害者に対して本当に申し訳ないことをした」と言う。各受講者の話を聞いたうえで、Coは〈被害者遺族は加害者を許すことはないでしょう。しかし皆さんはやがて社会に復

帰します。矛盾することですが、罪を背負いながらも人とつながって社会で生活してほしい」と告げ、社会でどう生きていくのかを被害者に伝える形で（注：単なる謝罪文にならないことを意図したため）、「私から被害者へ」のRLを書くことを求める。

Aの「授業の感想」：「断り方の練習をしました。私としてはいい勉強になりました。断る理由は人それぞれでしたが、私が感じたことは相手にどうかなると思わせないことが一番大切だと思いました」

Aの「私から被害者へ」：「（前略）何であなたが生き、私が死ななかったのかと苦しみました。しかし、この様な私にも愛する人がおり、また私を必要としてくれる人達がいるのです。その人達の支えもあり、この頃前向きな気持ちになり、自分らしさを取り戻しつつあります。これから先、何をすれば、どう生きれば、あなたへの償いになるのか分かりません。〇年の刑を務めれば、私の罪は許されるのか。そんなことで私の罪が消えるとは思っていませんが、眠れぬ夜にそんな考えが堂々巡ります。多分、この葛藤に苦しみがら、これからも私は生きていくのでしようが、これこそが私の罪の償いではないかと、この頃思う様になりました。それと共に、二度と罪を犯さないことは勿論のことですが、亡くなった方へ恥ずかしくない生き方をすることも一つの償いではないかと思うのです。これまでの考え方、生き方を改め、意義のある人生を送ることができる様になったら、私の償いの第一歩が始まると思います」

Coの返信：〈被害者に対して罪の深さを感じていることが伝わってきます〉と記し、〈文面にあったように、『心の葛藤を背負いながら生きていくこと』、そして、たとえ被害者が許してくれなくとも、『亡くなった方へ恥ずかしくない生き方をすること』がAさんにとっての償いなのですね。この償いは、死ぬまで続く長く苦しい道のりですが、どうかこの気持ちを大切に、Aさんご自身も幸せになることも『罪の償い』であると思ってください。これは私の願いでもあります〉と返信する。

なお、「私から被害者へ」のRLは今回初めて取り入れた課題なので、他の受講者の文面も簡略に記す。

B：「子ども達が私を受け入れてくれるか心配ですが、頑張るつもりです。天国から見守ってください」

C：「私は人を殺めようとして未遂に終わったものの、人を殺めようとした心の傷は残り一生背負っていかなければならない。（中略）残り少ない命を大切に、意味のある行いをして、亡き父母の下にまいます」

D：「なぜあなた達を傷つけてしまったのか。そうする必要があったのか。なぜあなた達だったのか。なぜ自分だったのか。そのことが悔やんでなりません。あの悪夢をあなた達は忘れないでしょう。決して自分を許さないでしょう。自分も死ぬまで今回のことを悩むでしょう」

E：「Jさん（被害者）が私のことを忘れず、許さないことは分かっています。私の勝手なお願いですが、できましたら私のことは忘れて、Jさんの生活や仕事、これからの幸せだけを考えて生きてもらえたらと願っています」

第7回（最終回） GWとの交換ノート

非行少年が書いた作文（過去の非行を振り返ったうえで、最後に『少年院を出たら人を頼らないで自分一人で生きていきたい』と記されている）を読んで感想を求める。するとEが「人を頼らないで、一人で頑張るところが問題ですね」と応じる。Coは、Eの言葉を称え、一人で頑張ることが抑圧を生み、それが犯罪に至る過程になり得ることをあらためて確認する。次に、「被害者の視点を取り入れたロールプレイング」を行う。方法は、受講者がペアになって加害者と被害者の役割になり、まず加害者役が出所後の思いを被害者に伝え、その後被害者役が加害者役に向かって言葉を返すというものである。その際Coは、被害者役は肯定的な言葉を添えることを条件とした（注：この条件を加えた理由は、謝罪に対して前向きな意識を持たせることも意図したため）。加害者役になった受講者は、謝罪した後RLに書いた内容を語る。被害者役になった受講者は、励ましや無念な思いなど思い思いの言葉を加害者役に返す。とくに印象的な応答をしたのはEである。Eは「私はあなたを絶対に許さない。しかし万が一、あなたがまた人を殺めるような場面になったとき、私のことを思い出してほしい。そして思い止まってほしい」と語った。

Aの「全体の授業の感想」：「何でも一番，人に負けないこと，そんな風に教えられてきたので，辛抱とか我慢とか頑張りとか男の美学の様に思っていました，この授業を受けてまた違ったところにも男の守るべきもの，大切なものがあるのだと気づきました。口ではうまく言えませんが，ケンカをするのも勇気なら，その場から逃げるのも，これまた勇気。一見，ケンカをするのが本物の勇気の様ですが，後者の方がどれだけ本当の勇気が必要か分かりません。この授業で学んだことを書けばキリがありませんが，私の価値観が変わったことは間違いありません」

Aとの個人面接（第2回）：「弱い自分を見せてもいいのだと思えるようになりました。人とのトラブルもなくなりました。自分自身でもとげとげしい部分がなくなったような気がします」

【アンケート結果】

7の「非常に強く思う」から1の「まったく思わない」までの7件法で評定した結果，前年度と比較すると，「1. プログラムの役立ち度」と「2. 交換ノートの役立ち度」は変わらず，「3. メンバーへの安心感」は下がり（注：SD値が他より高い理由はBのみ「1」と回答したため），「4. 『罪の意識』の深まり」と「5. 更生への決意の高まり」の2項目が上昇している（表3）。なお，Aの回答は，質問順に（7，7，5，7，6）であった。以下，Aの自由記述の内容を簡略に記す。

「満足した点はこの授業を受けていくうち少し肩の力を抜くことも必要だということも分かり，そんなところが私にとってプラスになったと思います」，「罪の意識が深まったことは悔悟とか反省とかも大事だけど，まだまだ他にもあることを発見することができました」，「『私から被害者へ』のRLと被害者とのロールプレイングについてはどの様な言葉を書き並べてみても，私の思うこと

の何十分の一も書くことはできません。また，それを人の前で話すのは私の本心であっても，薄っぺらな軽い言葉に私自身感じました」と記している。

『私から被害者へ』のRLと『被害者とのロールプレイング』は，今回のプログラムで初めて取り入れた課題であるため他の受刑者の自由記述（「ロールプレイングの自由記述」）の回答も以下に記しておく。

B：「なんで命を奪ってしまったのだろう。人の命の重みを感じた」

C：「ロールプレイングは，小心者の私が，人前で話すことができ，一人の人間として勇気づけられました」

D：「相手に謝ることしか頭に思い浮かばなかった。それ以上のことは，自分がしっかりと相手のことを考えて務めていくしかないと思った」

E：「最後の授業で被害者役になったときが（罪の意識が）とても深まった瞬間でした。被害者は常に忘れることはなく，私自身も忘れることはなく，その気持ちは私よりも被害者の方が相当に重いことを感じました」

IV 考察

1. GWとRLを取り入れた交換ノートによるAの心理的变化

第1回目の反省文を用いたGWの最後に，Aが「また万引しますね」と答えたことから，反省することは問題行動の根本的な解決にはならないことにAが気づいていることが分かる。ほとんどの受刑者は，「悪いことをしたら反省すること」は当然のことと思いついでいる。それだけに，新しい視点を取り入れられると，受刑者は自分が信じていた価値観に疑問を持ち始める。続く第2回目の覚せい剤を使用した芸能人の事例を扱ったGWでは，Coの『強い人間』とはの質問に対し，Aが「我慢強い人」と答えたことから，A自身が我慢強く生きることを重視した価値観を持っていることが伺われる。その後Coの問いかけをきっかけに，Aは自らの生き立ちを語り出し，「頑張ることを重視する価値観」を持つに至るには，幼い頃に「祖母を喜ばせることが背景にあったこと」を自ら洞察する。竹下は，本音から自己洞察へ向かわせるために必要なアプローチの一つ

表3 アンケート結果 ※（ ）内は前年度の結果

質問項目	平均	SD
1. プログラムの役立ち度	6.40 (6.40)	0.49 (0.80)
2. 交換ノートの役立ち度	6.80 (6.80)	0.60 (0.67)
3. メンバーへの安心感	4.20 (5.60)	1.10 (0.49)
4. 「罪の意識」の深まり	6.20 (5.60)	0.84 (2.33)
5. 「更生への決意」の高まり	6.40 (6.00)	0.49 (1.10)

として、気づきが深まるように問い返すことを挙げている⁽⁷⁾。「指導することよりも、受刑者自らが気づきを得るように導くこと」が指導者には求められる。「授業の感想」には「我ながらびっくりした」と正直な感想を述べ、課題の「幼いときのこと」では、厳しかった祖母の躰をありありと振り返り、「小学校高学年の頃には一番の悪ガキになりました」と書いている。1回目の個人面接で、「お山の対象になりたかった」と語ったAには、「力に対して力で対抗する考え方」が根強くあることは容易に想像できる。そして、この価値観こそ、Aが暴力団に加入したり犯罪を起こしたりした起因の一つと考えられる。

第3回の「感情表現を促すワーク1」では、感情を表現するワークを行っている。「授業の感想」で、Aが「弱いところを人に見せることなどできなかった私がこんなことができるとは思っていませんでした」と書いていることから、こうしたコミュニケーションワークでさえ、Aにとっては「弱い自分を人に見せる体験」となっていたのである。「私の意識改革は一步も二歩も前進した」と書いているように、「弱い（と思いつ込んでいた）自分」を表現することは、Aにとって、背景（地）に追いやられていた面に気づきの焦点が当たって前景（図）に転換するほどの体験となっていたと考えられる⁽⁸⁾。パールズ（Perls,F,S）は「弱いところや欠けたところを含めて丸まる一個の人間なのだという自己肯定がみられだすと、統合された存在として本来の感覚を取り戻すことができる⁽⁹⁾」と述べている。「弱い自分」を出せて、「意識改革」が進んだAは、前向きな気持ちになり「自己肯定感」を持ち始めていることが推察される。その結果として、「幼いときの私から父親・母親へ」のRLでは、「本来の感覚」すなわち「素直な自己表現」がつつられている。文面には、幼いときに両親がいなかったことの寂しさや、義父との関係がうまくいかなかったことの辛い思いがつつられており、しかも文字は涙で滲んでいる。過去の悲しみや辛さを「今、ここ」で再体験することによって、義父との間にあったわだかまりや亡き母親への寂しさといった未解決な問題（unfinished business）を解決していると考えられる。また、「素直な感情を出せなくなった理由」に「長男だから我慢しなさいと言われ、自

分でもそれがいいことだと思ってました」と記しているように、「我慢することが当たり前」という価値観が刷り込まれた原点を自ら洞察していることも見逃せない。

こうした過程を経て、第4回のGWからAの心のなかにあった「力に対して力で対抗する考え方」が変容し始めている。まず、いじめの事例に対して、「授業の感想」で「やられたらやり返す」と書きながら、「弱い部分を他人に見せていいというので、心の問題は難しいです」とAの心には葛藤が起きている。続く「過去の自分へ」のRLでは、父親との大喧嘩によって「男」として認められた過去の出来事を書いたうえで、「尖らず、肩の力を抜いて……」とあるように、尖って生きてきた過去の自分に対して助言をしている。注目すべきは、殺人事件の事例のGWである。「やり返すという方法以外、思いつかなかった」と語るAに、Coが暴力を使わない方法を述べると、Aは「それが、一番勇気が必要ですね」と言い、その言葉が自分の口から自然と出たことに自ら驚いている（第5回の「授業の感想」）。力に頼って生きてきたAが、新しい価値観、すなわち「力に対して力で対抗しない考え方」を取り入れた結果、「私の価値観が変わったことは間違いありません」（第7回の「授業の感想」）と自身の変化を心から実感している。この価値観の変容こそ、Aが再犯しないためには欠かせない心理的変化である。

そして、Aのもう一つの重要な心理的変化は、『人は大切な存在』と捉えるようになってきていることである。「更生するために必要なこと」で、Aは「以前なら『強い意思』とか書いたのですが、そんなことよりも『私を支援してくれる人が一番必要だ』と思う様になりました」と記している。性犯罪者の支援をしている信田は受刑者に対して「反省を促すより、まず再犯させないというのが重要」と述べ、出所者が「人とつながれないこと」を問題視している⁽¹⁰⁾。また、浜井は「人が立ち直るために本当に必要なものは、それをサポートし、導いてくれる友人や家族であり、深く反省し、悔い改めるだけでは、人は立ち直れない⁽¹¹⁾」と述べている。受刑者が再犯しないためには、我慢したり一人で頑張ったりするのではなく、何より人とつながって生きることは欠かせ

ない⁽¹²⁾。

2. 「被害者の視点を取り入れた教育」のプログラムに「加害者の視点」を取り入れたプログラムの効果

前年度のアンケート結果と比較すると、「プログラムの役立ち度」の平均値は6.40と変わらず高く、とくに前年度よりも「被害者に対する『罪の意識』の深まり」は6.20、「『更生への決意』の高まり」が6.40と、2つの質問項目がより高い数値となっている。5名ずつの比較なので単純に判断できないが、今回のプログラムは受刑者の更生により効果があったことが示唆される。以下、「被害者の視点」を取り入れた今回のプログラムの効果について個々の受刑者のRLと自由記述から考察する。

Aは「私から被害者へ」のRLで、「私にも愛する人がおり、また私を必要としてくれる人達がいいます」と「他者と自分の存在の大切さ」を記している。「自分の存在の大切さを感じることは、命を奪った他者の存在の大切さを理解すること」にも通じる⁽¹³⁾。「どのような言葉を書いても、またそれを人前で話しても、薄っぺらな言葉に私自身感じました」という文面からは、Aが言葉では表現できないほどの罪の重みを実感していることが理解できる。

当初から、このプログラムの内容を理解するのが困難だったのはBである。BはGWでも積極的に発言することがなく、結果として他の受刑者に対して安心感を持つことができなかった（アンケート結果の「グループへの安心感」の回答が「1」）。「私から被害者へ」のRLには罪の意識を感じさせる内容は記されなかったが、ロールプレイングで被害者の立場になり、初めて自分の犯罪行為と向き合っている。

罪の意識を深めるとともに、「意味のある行いをして生きるという前向きさ」もみられるのはCである。また、このロールプレイングが公開授業だったことはCに副次的な効果をもたらしている。「小心者の私は、人前で話すことができ、勇気づけられました」（ロールプレイングの自由記述）とあるように、人前で自分の思いを素直に話せたことは、Cの自己肯定感を向上させている。

内面から罪の意識が生まれているDは、「相手に謝ることしか頭に思い浮かばなかった」（ロー

ルプレイングの自由記述）と罪の意識を深めている。被害者へのRLには、被害者のことを生涯忘れず生きていこうとするDの罪の償いのあり方が込められている。

そして、このGWで最も大きな変化があったのはEである。Eは「私から被害者へ」のRLにおいて、被害者から目を背けたいという、自己本位であるが、Eの本音を書いている。Eにとって、「被害者の存在」は、これまで考えることさえ避けてきた「未解決な問題」だったのである。しかしE自身が被害者役になったとき、加害者役に対して、「もし人を殺める場面があったとき、私のことを思い出して思い止まってほしい」と告げている。「最後の授業で被害者役になったときが（罪の意識が）とても深まった瞬間でした」（ロールプレイングの自由記述）と書いていることから、EがこのGWで被害者感情を深く理解していることが読み取れる。百武は「本人の心のなかで未処理なままで存在している人間との関係に焦点を当てて、相手役になって言葉を出すと、自分でも予想もしなかった言葉が口から飛び出して気づきが得られ、深い理解へとシフトする」と述べている⁽¹⁴⁾。被害者の立場で言語化できたからこそ、Eの罪の意識が劇的に深まったのである。

以上から、「加害者の視点」のGWの最後に「被害者の視点」を取り入れたGWは効果的であったことが理解できる。加害者の視点から始めて、各受刑者は自己理解を得、さらにGWやRLなどで自分の心の奥底に封印していた感情に気づいている。何よりCoやグループメンバーに支えられている安心感があったからこそ、仲間であるグループメンバーが役割を演じた「被害者」と真摯に向き合う勇気が受刑者に生まれ、罪の意識が深まったと考えられる。

V 今後の課題

本研究の課題として、グループ全体のダイナミズムをいかに高めるかが挙げられる。Bが「グループへの安心感」の質問に「1」と回答しているように、一人の受刑者が輪に入れないだけで、グループ全体の凝集性が低くなってしまふ。受刑者に対する個別的支援をどのように行うかが課題として残されている。また、そのことを踏まえて、より充実したプログラムを作成するためには、

GWやノートの課題を精選し支援者の力量を高めることも重要である。

引用文献

- (1) 法務省：平成22年度犯罪白書，重大事犯に対する処遇 2010.
- (2) 寺村勇一・香西貴史：滋賀刑務所における「被害者の視点を取り入れた教育」の取組について 日本矯正教育学会第44回大会発表論文集，46， 2008.
- (3) 龍谷大学矯正・保護研究センター編：キャンベル共同計画介入・政策評価系統的レビュー 1， 2008.
- (4) 浜井浩一：2円で刑務所，5億で執行猶予 光文社 p86， 2009.
- (5) 黒沢香・村松励：非行・犯罪・裁判 新曜社 p51， 2012.
- (6) 藤岡淳子（編著）：関係性における暴力，岩崎学術出版社 pp83-84， 2008.
- (7) 竹下三隆：書くことによる感情表現と自己洞察 日本ロールレタリング学会第1回発表論文集，42-43， 2000.
- (8) 岡田法悦：実践・“受容的な”ゲシュタルト・セラピー ナカニシヤ出版 p29， 2004.
- (9) Perls,F,S : *The Gestalt Approach & Eye Witness to Therapy*, Science and Behavioral Books,Inc.1973, 倉戸ヨシヤ（監訳）ゲシュタルト療法 その理論と実際 ナカニシヤ出版 p29， 1990.
- (10) 信田さよ子：見逃せない父の暴力，池谷孝司（編著）死刑でいいです 共同通信社 p76， 2009.
- (11) 前掲（4）書， p224.
- (12) 岡本茂樹：グループワークと交換ノートを用いた殺人を犯した受刑者に対する心理的支援 心理臨床学研究，30（4），559-570.
- (13) 岡本茂樹：受刑者支援にエンプティチェア・テクニックとロールレタリングを導入した面接過程 ゲシュタルト療法研究，1， 19-35， 2011.
- (14) 百武正嗣：エンプティチェア・テクニック入門 川島書店 pp18-19， 2004.